



聖家族 (ルカ 2:22-40)

神の言葉にしっかりと立って生きる

聖家族の祝日を迎えました。マリアとヨセフが神殿に幼子イエスを献げるためにやって来ると、シメオンが幼子を抱きます。このシメオンに焦点を当てて、糧を得たいと思います。

御降誕のミサが終わって一息という感じです。ただ木曜日にはまた神の母聖マリアの守るべき大祝日が回ってきますので、まだ気を緩めることはできません。あとひと踏ん張りといったところです。

徒歩巡礼に向けて練習のために歩き出しました。毎日歩くところまではいっておりませんが、今は中ノ浦教会まで、片道1時間ちょっと、往復2時間ちょっとの道のりを歩いています。坂道なので、良い姿勢で歩くことにも役立っています。時々見晴らしの良いところで海が見えて、「海のほうがいいなあ」と心が揺れますが、それでも頑張っています。

福音朗読は、幼子イエスが神殿で献げられる場面が選ばれています。神殿にはシメオンという預言者がとどまっています。彼は「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない」(2・26)とのお告げを聖霊から受けていました。

おそらく年老いていただろうシメオンが生きていたのは、聖霊によるお告げに支えられてのことでした。「生きている」という姿を「立っている」と置き換えると、シメオンは聖霊によるお告げにしっかりと立っていたのでした。

そこへヨセフとマリアが幼子イエスを神殿奉献のために連れてきます。シメオンは心の中で、何度も何度も繰り返して自分が会うことになっているメシアを思い描いていたのでしょう。初めて幼子イエスを見ただけで、自分の願いがかなえられたことが分かりました。

シメオンは幼子を抱き、喜びの声を上げます。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目でああなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」(2・29-32)

これまでシメオンは、聖霊によるお告げにしっかりと立って生きていたのですが、今幼子イエスを抱いて、新しい生き方になりました。救い主を信じて、神の救いを確信して生きる人になりました。今まではやって来るはずの約束に固く立っていましたが、今はその約束の実現の上にとしっかりと立って生きる人になりました。

シメオンの姿は、わたしたちにもあるべき生き方を示していると思います。わたしたちは誰でも、何かの上にとしっかりと立って生きているわけですが、そのしっかりと立つ場所はイエス・キリストであるべきだということです。

健康に注意して、健康の上に生活を成り立たせている人もいます。健康の上に生活を成り立たせている人もいます。健康の上に生活を成り立たせている人もいます。健康の上に生活を成り立たせている人もいます。

しょう。けれどもそれらを土台にして生きていると、いつかその土台が不安定になり、根こそぎ奪われることもあるのです。わたしたちがしっかり立って生きるべきは、不安定にならない土台、決して奪い取られることのない土台でなければなりません。それは神の言葉ではないでしょうか。

神の言葉は今や人となってわたしたちの間に住まわれました。救い主がいつかおいでになるという未来の約束は終わり、今や目の前に神の言葉が、神の約束が与えられています。この人となった神の言葉こそ、わたしたちがしっかり立って生きる土台です。わたしたちが神の言葉にしっかり土台を置いて生きるなら、人となった神の言葉を通して、わたしたちも「たくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれて」生きることができます。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)